

鎌田茂雄著「正法眼蔵随聞記講話」講談社学術文庫 1987年4月8日刊を読む

悪口をもって人を責めるな

1. 夜の坐禅が終わった後で、道元はつぎのような法話をされた。口ぎたない言葉で僧を叱り責めたり、また過失をあげてそしってはならない。たとえ、どんなにその僧が悪いからといって、道理にかなっていないからといって、理由なく憎しみそしってはならぬ。どんなにその僧が悪いからといっても、僧が四人集まっていれば僧団を作っているのであって、国の重宝であり、最も<sup>きえ</sup>帰依し、尊敬しなければならないものである。

2. 一山の住持や長老といわれる人であっても、師匠、善知識といわれる人であっても、弟子が不当なことをした場合には、慈悲心、老婆心をもってよく教えて、正道に誘引しなければならない。その時、たとえ打たねばならない者を打ち、叱り責めねばならぬ者を叱っても、相手の過失をいいたて、悪口をいおうとする気持を起こしてはならない。

亡くなった私の師匠である<sup>てんどうによじょう</sup>天童如浄和尚が天童山に住持をしていた時の話であるが、僧堂で多くの僧が坐禅をしていた時、居眠りをしている僧を戒めるために、自分のはいている履物<sup>はきもの</sup>で打ち、その非を叱ったが、多くの僧たちはみな打たれることを喜び、その師の行為をほめたたえたのである。

3. ある時、如浄は法堂にのぼって説法したついでにつぎのようにいわれた。

「自分はすでに年をとったから、大衆と一緒に修行するのはやめて、<sup>そうあん</sup>草庵に住して老後を養っていればよいのであるが、自分は衆僧の指導者として、お前さんがたの迷いを破り、仏道を教えるためにこの天童山に住持となっている。だからこそ修行を怠ったり、道理にかなわぬ行ないをする者に対して、<sup>かしゃく</sup>呵嘖の言葉をいったり、<sup>しつべい</sup>竹篋で打ったりするのである。これは大へんつつしまなければならぬ恐るべき行為であるが、しかしこれは仏に代わって行なっているのである。どうかお前さん方、慈悲をもってこれを許して下さい」

というと、衆僧はみな涙を流したのであった。

4. このような慈悲心、このような気持をもってこそ、始めて大衆を教化することができる。住持、長老であるからといって、むやみやたらに大衆を支配し、自分の小僧のように思って呵嘖するのはあやまりである。ましてその資格もなく、その立場にもない者が、人の短所をいい、他人の欠点をそしるのはあやまりである。よくよく気をつけないければならない。

5 . 人の欠点を見て悪いことだと思い、慈悲心をもって教化しようと思ったならば、その人が腹を立てないように配慮して、第三者の他人のことにようにいって教え導かなければならないのである。

P.57 ~ P59

[ コメント ]

人の生き方の中で、人の悪口・人格批判を言わないことほど大切な生き方はない。毎日の生活の中でどう実行することができるか、道元禅師から学ぶことは多い。

- 2009年2月2日林明夫記 -